
異世界ライフは幸せだろうか

ヴァルハラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ライフは幸せだろうか

【Nコード】

N9307M

【作者名】

ヴァルハラ

【あらすじ】

絵にかいたような不運な人生、常にぎりぎりの人生を歩んできた高嶺涼介は、高校生活終了の日に、トラックに跳ね飛ばされて人生も終了してしまう。そんな人生を、あまりにかわいそうに思った神様、というかあまりにも申し訳なく思った神様は彼に異世界で第二の人生を与えた。そこは文明ではなく魔法が支配する、魔術の世界。そんな世界に彼は、神様から素敵な能力を授かって転生する。二度目の人生、彼はこんどこそ幸せな人生を歩めるのか。

0 不幸少年と神様

俺の人生は不幸だった。

とにかく、何をすることも運が無いのだ。交通事故はそこその頻度で起こってしまう。

まあ分かってはいるからほとんど回避できているわけで、ぼーっとしてると2、3日に一回死んでいると思う。

俺の人生はここまで18年。この先もできるだけ続いてほしいが、どうなるかは分からない。

……なんとか、高校卒業まで来たな……

卒業証書をカバンの中にしまいこんで、俺は通学路を歩いて家に帰る。

突然、大きなクラクションの音が響いた。

大きな道路だ。すぐ横を車が走っている、まあこんなこともあると思われるが……こんな場合、大抵ひどい目にあいかけるのは俺だ。

「……え？」

だがこんな日に限って。ようやく卒業できたこんな日に限って。

「マジか……」

大型のトラックが数台、横滑りにこちらに突っ込んできていた。

なんだ、なんなんだ。どんな事故が起これば、そんなに何台もトラックが同時に同じところをめがけて滑ってくるんだ!?

のに、体が動かないとは……

「やっぱり、恨んでるよな」

「ちつきしょおおおおおおお！　せっかく目の前にいるのによー！」

神様は、すごく申し訳なさそうな顔をして俺を見下ろしている。真っ青な髪の毛に、白を基調とした服を着ている若い男だ。もつとひげ面のクソじじいだと思っていたが、イメージとはだいぶ違う。

「お前が、ものすごく不運な人生を歩んだのは分かっている。だがどうしようもなかったんだ……すまない」

「すまないじゃ、ねえよ！　やっぱり俺死んでるんだろ！？」

「ああ……だから、お前を別の世界に転生させる。そこで、第2の人生を生きてくれ」

「……いや、いきなりそんなこと言われても……別の世界？」

「そっだ」

「俺のこれまでの人生は？」

「……当然、無駄にはしない。お前がこれまで生きてきた時間、何より何故か空費され続けたお前の持っていたはずの幸運は全て何らかの形で返す」

空費され続けた……？

俺には、幸運とやらが全く無いものだと思っていたが、あることにはあったのか。

「幸運も才能の一つだ。お前が空費した幸運のすべては、これから行く世界で一番重要になる才能に全て回してやる。……俺からの、ちよつとした謝罪分も上乘せしてな」

「……つまり、どうなるんだ？」

「お前がこれから行く世界は、お前が暮らしていた世界とは全く別の位置に存在する異世界だ。常識もまるで違う。そこは文明が支配する世界ではない。お前たちの世界では空想のものとされた魔法が一般的に存在する、魔術の支配する世界だ」

魔術……まじかよ、そんなオカルトも別の世界となると存在しているのか。

「では、簡単に魔法について説明しよう。まあ、俺も詳しくは知らないんだが、どうやら神という存在自体に大きく魔法が関わっているようだな、俺にもちよつとは分かるんだ」

「へー」

「とりあえず、もう動けるだろう。立ってくれ」

言われて気がついた。

確かに体が動く。俺は言われた通りにその場に立ちあがった。なんだか肌触りがいいと思っていた地面は、芝生が敷かれているようだ。

「もうすでにお前の空費された幸運は全て魔力にあてられている。いいか、魔法を使う上で必要なのはイメージ力と知識だ」

「ふーん」

「その点について我々神は全知全能であるため完全だ。だがお前の場合はそうはいかない。とりあえずなんだ……お前は炎を知っているか？」

完全に俺のことをバカにしたような質問を言いながら、神様は手のひらの上に炎を出現させた。

ゆらゆらとゆらめいているそれは、まさに炎。手のひらが熱くならないのか心配だ。

「知ってる」

と、答えると、「じゃあやってみろ」と神様は何の説明もなしに言う。

だが俺も馬鹿じゃない。イメージと知識が必要なんだ。

そして俺は炎を知っている。ならば後は、手のひらの上に炎をイメージすればそれで発生するんだろう。

やってみると実にあっさり炎は発生した。

マッチ棒に灯るような、ごく小さな火が。

「上出来だ」

「え、いや、なんか恥ずかしいな」

小さすぎねえか……？

「気にするな、最初はそんなもんだと思うぞ？ 普通はそこからイメージ力を鍛えたりするんだと思うが、お前の場合はそんな必要はないから尚更気にするな」

「あ、え？ ああ、分かった……」

俺が答えると、神様は「よし」とだけ言い、手のひらの上でゆらめいていた炎を消した。

そしてこちらに歩み寄ってくる。

「これから、俺が力をやる。具体的には、魔力補正とイメージ力の補正だ」

「すまん、よく分からない」

「つまり無限の魔力と、一瞬にして具現化にまでつなげられるほどのイメージ力だ」

「ち、チートじゃねえか！」

神様は手のひらをこちらに向けた。

少しすると、神様の手のひらに輝く光の球が出現した。大きさはテニスボールくらいだ。これが、神様から俺への謝罪分の力……

「お前の第二の人生が、幸せなものであることを祈る」

「ああ……ありがとう」

高嶺涼介の去った数秒後の神界。

青い髪の子、セテカは目を細めて、笑顔で、涼介の消えた後もその場所を見つめ続けていた。

実際には、体の芯までしびれていて、眉すら動かすことがかなわなかったことは、誰も気づかない。

1 - 爬虫類に鋼鉄

目が覚めた。

眠った覚えはなかったが、俺は眠っていたらしい。

風が吹いている。野外だ。地面にはさっきまでいた神様の世界に比べると、かなり肌触りは悪いただの雑草が生えている。

本当に、俺は異世界に来てしまった……ということか。

実感は無いけど、突然目の前にモンスターが現れたりすれば、いやでも実感するだろうな。

ありがちに思えるかもしれないが、俺の場合はそれがこれまでの日常だったわけだ。

考えうる最悪のパターン。それは決まって俺に訪れる。

立ち上がり、辺りを見渡す。

「……はあ」

俺の背後にはごつい爬虫類がいた。

ワニっぽいけど、でかすぎだろ……しかも後ろ足が……左右に3本ずつ。前足を合わせると、合計で8本の足が生えている。気持ち悪い。

「グオオオオオ!!」

ワニが吠えた。

ちきしょう。神様のボケ、せめてもうちょっと落ち着ける場所に転生させるよ。

ワニは8本の足を高速で動かしながら、こちらに突っ込んできた。

「こ、こええええ!!」

背を向けても、絶対に逃げられない。

まずは真正面から敵を見ることだ。でなければ、山で初めてクマに襲われた時のように大変な目にあう。

普通は、真正面から対峙したところで、クマやトラックやワニのモンスターに人は勝てない。轢かれるか、引つ掻かれるか、食われるかして死ぬ。

だが今の俺には、チート級の戦う力がある。落ち着け、俺は、不運だが勝てる!

とりあえず壁を作ろう。あのワニの突進力がどれくらいか知らないけど、ダンプカーよりは弱い……よな?

目の前に、正方形の鉄製の箱をイメージする。
すると何も無かった場所に、四角い金属の塊が発生した。

ゴオン、とすごい轟音が響いた。

かなり巨大な鉄の箱、まあ一片が3、4メートルはあると思うんだが、それがずいぶんとこちらに押し込まれた。すごい力だ。

……どうするか、どれくらいのことができるのかはつきりと分からないんだが……

力なんていう曖昧なものも、イメージすれば創れるのだろうか。

学校の物理の授業で習った程度のもものだけど、物体の運動エネルギー。これをこの鉄の箱に持たせることができればいいんだ。

イメージ。驚くほどにあっさりと頭の中で映像化された運動エネルギーが構築される。

「ぶっ飛べ！」

鉄の箱はすごい速さで突き進んでいった。
地面ががりがり削られている。

すげえ……ちょっとやりすぎかなあとさえ思ってしまった。

この辺りは見渡す限り何もなく、遠くのほうには山。別の方角を見れば森、まあよく見ると町っぽいものも見える。

だが近くには何も無い。ただ草原が広がっているだけ。
だからよく分かる。ものすごい速さで突き進んでいく鉄の箱の行方が。

1キロ以上は……絶対に進んでいる。

ま、あれのことは忘れよう。あれだけの量の鉄だ。ちょっとくらい誰かの役に立つかもしれない。

もし前の世界のぼくがあの先にいたら、100パーセントあれに潰されているんだろうな、と思うとちょっと怖いけど。

「しかしすごいなあ」

何がって、俺の能力？ 神様から貰ったが、今は俺の能力だ。仕組みとかは全くもって分からないが、頭の中で思ったもの、イメージしたものが本当に現実に出てくる。

俺の力はすごい。それはありがたいことではある。多分。

それで、俺はどうすればいいんだ？

どうやってこの世界で生きていけばいいんだ？

……必要なものは、住む場所だ。

しかし、これは工夫すれば、というか魔法であつという間に家くらい作れそうだ。

それから食べ物、魔法で家よりあつさり調達できそうだ。

で、仕事？ 必要無いか。

金。もつと必要無い。

うーん、ぶっちゃけ人間なんか食うものさえあれば死なないからな。

魔法つてホントすごい。これが使えるだけで生きていけちゃうんだな。

それで、充実した暮らしをしようと、生意気にも考えるとすれば……

「家族はいない、やっぱり人と関わりたいかなあ」

住む場所の条件つて、日当たりとか、駅までの距離とか、広さとか、いろいろ言うけど、そんなのどうでもいいと思う。

大事なのは、自分の好きな人と会える、暮らせることなんだと思う。

それが無ければ、あんな不幸な人生もつと早くに幕を下ろしていいかもしれない。

遠くには、町も見える。

あそこを目指すか。

実に小さな町のようにだ。

で、どうやって行こうかなあ……

歩きは無いな。ただ何も無い草原がずっと続いているだけだ。景色を楽しむ要素は微塵も無さそうだし。

となると、せっかくの魔法を使わないほうがどうかしている。

何か乗り物が出せればいいけど……さすがに車やバイクの構造なんか知らないし、知識に無いことはイメージできないな。

あ、そうだ。

あれがある。

さっきの鉄の箱ではなく、今度は木製の箱をイメージする。

形は正方形ではなく、平べったい直方体。そして2か所手でつかめるような取っ手をつける。イメージが完成すると、目の前にそれが創られた。

そしてそれに乗る。

乗り心地は……良いとは言えないけど、鉄に比べればまだ。いい素材が思いつかなかったからしょうがない。

取っ手を掴み、運動エネルギーをイメージする。スピードは、どうしよう。60キロくらいでいいか……

即席の乗り物は動きだした。

「は、はやっ！」

体勢が低いため、体感時速はかなりすごい。

前方からのすがすがしいを若干通り越した風を受けながら、俺は
時速60キロで草原の上を木製の乗り物で走り抜けていった。

2 - 不幸中の幸い

すがすがしい……よりはちよつときつ過ぎる風を、主に顔面で受けながら俺は草原を走り抜けていく。

やっぱり距離があるな。

体感速度がいかに速くても、時速60キロ。車で普通に走っている程度のスピードだから結構時間がかかる。

……一気にスピードを上げて、余裕を持って町の手前で止まれば、大丈夫だ……

何にも面白くない景色を眺めていても、疲れる。

やるか、F1クラスの超スピード。とりあえず300キロくらいで……

別の世界が見えた

「うおおおおおおおあああああ……！」

体が完全に浮いてる！

取っ手をしっかりさせておいてよかった……けど、これ手を離したら大惨事だ。

町がどんどん近付いていく。そろそろ止まって、後はもうゆっくりしたスピードで行けばいいや。

イメージ。落ち着け。

止めるんだ。運動エネルギーを消し去る。

イメージはすぐに反映された。俺が作った手作りの乗り物は急停

止してくれた。

そして俺の世界はぐるぐると回り始める。

慣性の法則、というものを知っているだろうか……？

世界がゆっくりになった。

これは何度も経験したことがある、走馬灯というやつだ。ただこれまでの人生は、振り返りすぎてもう振り返ることもあまりないの
で、俺は慣性の法則について振り返り、復習を始めた。
動いている物体は急には止まらない。

例としては、電車が停車する時、体は電車の進行していた方向に
進みそうになる。この現象だ。電車は比較的ゆっくり止まってくれ
ているので、あれぐらいで済むが……

時速300キロで走っていた物体が急停止した時、乗っていた人
間がどうなるかと言えば

そのままの勢いで前方に吹っ飛ばされる。

そうならばどうなるか。運が無いとDEATH。

俺は基本的に不幸体質である。

やばいやばいやばいやばい。

なにか、クッションは無いか！？

綿……だめだ、助かる気がしない。何か無いか……水か！？

ダメだ、水は流れていってしまう。それにこのスピードじゃ突き
抜けてしまう。そうだ、なら圧縮すればいいか！？

くそ……考えてる間に死ぬぞ……

あ、そうだ。俺が今吹っ飛んでいるのは、俺が運動エネルギーを
もっているからだ。

ならそれを消してしまえばいいんだ。

すぐに実行する。俺の体はその場で静止した。

「痛っ」

地面から少し浮いた位置を飛んでいた俺は、地面に垂直落下。運悪く頭から落ちたが、まあ不幸中の幸いか……

「人はいるみたいだな……」

町は小さいが、人は歩いている。しかし小さな町だな。それに電気も通っていないようだ。

まあそれはそうか。この世界には元の世界のような文明は無いらしいからな。

何人かはこつちに気づいている。そして怪しいものを見る目でこちらを見ている。まあ時速300キロで飛んできた人間だからな……

まあ、とりあえず町に入って、話をしよう。

俺が町のほうへ歩いて行くと、向こうからこちらに数人近づいてきた。

全員、人間だと思われる。ただド派手な髪の色、そして髪の色と同じ色の瞳をしている。

「何者だ」

完全に警戒されていますね。

「えつと……」

「お前の様子はずっと見えていた。異質な魔法を使う、かなり高位の魔法使いと見えるが目的はなんだ？ 名を名乗れ、見た目にも異質だ、種族はなんだ？」

こっちはまだ何も言っていないのに、すごい質問の嵐。ていうか種族って……

「名前は、高嶺涼介。種族……日本人？」

「珍妙な名前だ」

うるせえ、そりゃ文化も違うだろう。

「タカミネリヨウスケだな、そして種族、ニホンジン？ 知らない、聞いたことが無い」

「うーん……そりゃ、まあ、別の世界からきたもので」

どんどん表情が訝しげになっていく。

そりゃ立場が逆なら、俺は全力で訝しむさ。とりあえずこいつは頭がおかしいと判断して、病院に連れていくか警察を呼ぶだろう。

「お前、頭でも打ったか？」

違う！

まあ正しい反応だけど、俺が言われてもそういつと思うけど。俺は本当に一度死んで、この世界に転生したんだ。

「いや、頭は大丈夫だ。これで正常だ」

「……到底信じられない、が……お前の異質な魔法。そしてその異質な姿から、完全に否定することもできない……」

異質な姿はひどくないか？

お前らと俺の違いって……髪の色の違いくらいしか無い気がするんだけど、あと瞳の黒目の色か。それくらいじゃないか？

「とりあえず、中で話を聞こう。ついて来い」

めっちゃくちや警戒されたままだけど、とりあえず町の中には入れてくれるらしい。

「いいか。少しでも妙な真似を見せたら、即攻撃する」

「あー、はい」

絶対しないよ。そんなことする利益が全くないし。

しかしここまで警戒するものなのかな……

まあ見た目があやしくて、時速300キロで町の入り口まで飛んできた男を警戒するのは当たり前なんだけど……

なんか警戒し過ぎな気も……やっぱり日本とは違うってことかな

「おわっ！」

何かに躓いた……？ いや違う、靴紐が解けてやがった。

それを逆の足で踏みつけたまま歩こうとしたから、体が前のめりに倒れてそして、赤い髪の兄さんを両手で突き飛ばしてしまった。

なんだそりゃ。タイミング悪っ！

「貴様！」

「いや、ちがつ」

抗議は聞き入れて貰えなかった。

赤い髪の兄さんは、両手で輪を作り、そして輪の中に青白く光る雷の球を生成していた。もうめちゃくちや戦闘モードだ。

しかし、赤い髪だからてつきり炎でも使っと思ってたな。いや、そんなことどうでもいい。

とりあえず、創ることも消すことも魔法はできるんだから消すことはできるはず。

雷の球を消し去るイメージを……

消えない？

「ぐあっ……！」

雷の球が直撃した。

何度か喰らったことのある、スタンガンの衝撃のような、だがそれよりもかなり強い。

激しい痛みとともに、全身に痺れが広がる。

立っていることができなくなり、その場に膝をつく。

なぜだ。なんで消せないんだ？ 他人が魔法で創り出した現象だったからか？

「魔法で防御するわけでも、回避するわけでもない……どうい

ことだ？ かわせなかったというわけじゃないだろう」

かわせないから、防御しようとしたが失敗しました。

「戦う……つもりは、無いから……」

「なに……？」

「今の……躓いた、だけ……」

痺れてうまく喋れもしない。

なんか、転生してなお、そりゃ転生前よりはマシだけど不幸体質のままの気がするぞ。

「……それは、すまない。早とちりだった」

怪しみながらも、申し訳ないと謝ってくれた。

……これだと、ちゃんと話せばわかってくれそうだ。

「じゃあついて来てくれ」

「あ、待ってくれ」

「……？」

全員が振り向き、俺を見る。

痺れて歩けないんだ。

それが通じたのか、赤い髪の男は俺に肩を貸してくれた。

どうにかそれで、町の中に入ることはできた。あとは、どうやっ

て俺の主張を信じてもらうかな……

3 - 室内で花火は禁止

町は中に入っても大きな建物や、派手な建物は無くやっぱり小さい。
い。

小ぢんまりしていると言っておこう。なんか小さい小さいって言うのは失礼な気がする。

建物の形は、どれも元の世界の家とは違う形だ。

なんというか、小ぢんまり。

その町の中のほうに、他の建物とは明らかに違う、大きな建物が。

「ここだ」

だと思いました。

そして俺は、この建物の中で、背の低い白銀の長髪のなんか端整な顔立ちの男の子と話をすることとなった。

この子がこの町の重要な、お偉い人物であることはだいたい分かったが、俺を怪しんでいるというのに警備は誰もいないというのは、この子が信頼されているってことか、俺が信頼されたってことか……
前者だろうな。

「とりあえず」

ものすごいソプラノボイスで男の子は喋りはじめた。

女の子だと勘違いしてもおかしくないレベルだ。というか容姿もそんな感じだから、間違えてもおかしくなかった。

なぜ俺が自信を持って男の子だと言えるか。

それはこの部屋に入る直前に、赤い髪の男に念を押されたからだ。
『部屋の中にいる人は男だ』と。妙に真剣な口調で。

「私の名前はルカ。よろしくな」

「よろしく。俺は高嶺涼介」

「……長いな」

「この世界には、もしかすると苗字というものは存在しないのかな

……

「なら涼介と呼んでくれ」

「そうしよう、リョウスケ。お前は異世界からきたと言ったな？」

「ああ」

「それを嘘だとは言わない。いや、言い切れない。お前は何か、別の世界から自分がやってきたと証明できるものを持っているか？」

「……そう言われても、何かあるだろうか。」

「今手持ちにあるものは、100パーセント繋がらないであろうケータイ電話……そうか、文明が無いんだから、機械を見せればいいんだ。」

ポケットに手をつ突っ込んでみる。

無い

「あれ、落としたかな……」

「……無いか？」

「すまん、無くしてしまった」

ル力はうーん、と考え始めたがすぐに顔を上げた。

「お前のその黒い髪、そして黒い瞳はこの世界では珍しい。というかそんな種族の存在は確認されていないんだ」

「そうなのか？ 俺のいた世界じゃ、黒い髪は珍しくもなんともなかったぞ」

「……黒い髪は、魔力を全く持たない者の髪の色だとされている」

「へえー……」

「魔族の髪の色と瞳の色は、生まれもった魔力の量で決まる。魔力の才能がある者ほど、髪の色は白に近い」

つまり、その逆の真っ黒な髪は魔法の才能が全く無い者、魔力を全く持たない者の髪の色というわけか。

もともと魔法なんか無い世界で生まれた俺だったら普通だ。

……てか、魔族？

それってどういうことだ？ この世界の人間は魔族と呼ばれているということか？

「リヨウスケ、お前はどんな魔法が使える？」

「どんなと言われても……なんでもできるが」

俺がそういうと、ルカは実に怪訝な表情になった。

「なんだ、リヨウスケは魔王か何かか？ 魔法は即席で使える代物じゃない。精神修行と膨大な知識、それに魔力がかけ合わさってようやく使えるものだぞ」

そういえば、俺の魔法はこの世界でいう一般的な魔法とは違つと、あの神様が言っていたな。俺の魔法は神様の魔法に近いわけだ。

「俺の魔法はちよつと異質、というかなんというか、この世界の魔法とは違つみたいなんだよな」

俺がそういうと、ルカの表情が一変。

まるでおもちゃを見つけた子供のように輝きはじめる。なんだ、どうしたって言うんだ……？

「では、その魔法を見せてくれ！ その異質な魔法こそが、リヨウスケが異世界から来たということの証明になるだろう！」

それが一番手っ取り早いか。しかし、異質な魔法というとどんなものを見せればいいのだろう。

「分かった」

何とかかなりそうだ。話がちゃんと通じて助かる。

とりあえず俺の魔法を披露するために、場所を移すことになった。

途中ルカとは離れた。

そしてかわって俺のもとにまた派手な髪の色の人がやってきて、「急いで準備しますので、お待ちください」などと言われた。綺麗な女の人だ。

なにやら冷たい飲み物と、おいしそうなケーキっぽいものまで出してもらって、さっきまでとは待遇が違いすぎる。これが、幸運というやつか…… 幸せすぎて死ぬんじゃないか？

ああ……これ、おいしいや。

飲み物のほうは……にがい……けど、甘いケーキにはよく合う。これはコーヒーだな。

「おかわりお持ちいたしましょうか？」

なにここ楽園？

とりあえずいただく。

待てよこれ、このパターン前にあったぞ。確か修学旅行先で、こんな風にいるいろ出してくれるから、パクパク食べてたら凄まじい代金請求されて命からがら逃げたっていう。

それにぼくは綺麗な女の人が絡んでハッピーエンドだったことは人生一度も無い……

「あの、すみません」

一応、確認しなければ。

「これって、無料、ですか？」

「はい。お客様ですから、これくらいは当然のおもてなしです」

楽園キター！

俺今だったら自分が本当は死んで、ここは天国、もしくは死の直前に俺自身が見ている幻想の世界だとしても納得できる。てかそれでも構わない。

俺が全部食べ終わったくらいに、ルカがこっちに来た。

「準備ができた。では頼む」

ルカに言われるままに歩いていく。一体何の準備をしていたんだろう。

どうやら別の建物らしい。

妙に大きな建物の中に案内され、俺は扉をくぐり、薄暗い通路を通り、そして広い部屋に出た。

ああ、やっぱりここは紛れもない現実なんだ

「異世界の大魔法使い！ タカミネリヨウスケ様の大魔法ショー！ 第一回、始まりです！！」

即席でセッティングしたと思われる、ステージ。そして満員のお客様。

なんか待遇が良すぎと思った。まさかこんな裏があったとは。

「思い切り盛り上げてくれたまえ」

ステージの端のほう、お客からは見えない場所で俺を見ているルカ。いやいや、おかしいだろこれ。どう考えても展開早くないか？

「俺、警戒されてたんじゃねえの？」

「ああ、私と顔を合わせるまでは、な。今は信用している。これはいわば歓迎パーティのようなものだよ。だから盛大に盛り上げてくれ」

「なんで歓迎される側の人間が、盛大に盛り上げることを考えないといけないんだよ！」

「……それもそうだが、私たちはリヨウスケが敵ではないと確信しているが、まだ異世界から来たとは信用しきれないでいる。だからここで、格の違いを見せつけてくれたまえ」

「……は？」

「異世界から来た、敵無しの大魔法使いっぷりをな」

話が飛躍しすぎている！

困った、俺はどうすればいい。

これまでの人生、ステージを一人で盛り上げるなんていう大役、こなしたことが無い。

「ドカンと一発、頼む」

俺がおどおどしているのが伝わったのか、端からルカが指示を出してくれた。

ドカンと一発、盛り上がる……たとえば、あれしかない。だがそれをやるにはここは明るすぎるな……よし、まずは闇を作ろう。

光を遮断する黒煙をイメージ、そしてそれを部屋の側壁、天井に這わして行く。

全ての窓が闇にふさがれて、部屋に真っ暗な闇が訪れた。

そして、ドカンと一発盛り上がるといえばこれ、夏の風物詩、花火。

夜空にうちあがる、大量の打ち上げ花火。イメージし、天井近くに打ち上げる。

ひゅるるる、とおなじみの音を部屋中に響かせながら天井に上がっていき、そして大きな音とともに光の花を咲かせた。

「おお……これは、すごい……」

ルカが仮想夜空を見上げてつぶやく。お客さま方からも歓声が上がっている。

……なんか、焦げ臭くねえかなあ……

いやな予感がする。

俺が創りだした黒煙に混ざって、明らかに違う、普通の煙の臭いが漂ってくる。

あ、これミスったな。

ルカも気づいたらしい。

「あれ、これ建物が燃えてないか？」

よく見えないから、魔法で創った黒煙を消滅させる。
すると天井がめらめらと燃えていた。

「ああ……燃えてるな」

「これはまずくないのか？」

まずいですよ、とてもやばい。これから信用してもらおうつてのに、早速何をやらかしたつてこれ放火ですからね。

ああー、ちきしょう。室内で花火はやるなよ！

とりあえず炎を消し去る。

すると会場がどよめいた。

「い、今何をした!？」

ルカがこれでもかと言わんばかりに目を見開いている。

「何つて、炎を消したんだけど」

「リヨウスケの魔法はそんなことまでできるのか!？」

……炎を消すというのは、すごいことだったのだろうか。

どうも、そうだったらしく。

炎を消滅させる魔法を使えたということが決め手になり、俺は異

世界の大魔法使いと認められた。でも、俺は大魔法使いじゃなくもとはただの高校生なんだけど。

ていうか、異世界の大魔法使いっていう二つ名は、正直恥ずかしくてしようがない……

が、まあ、町の人の信頼は得ることができたらしく、俺はこの町で暮らし始めることができそうだ。

……なんか、物事が順調に進み過ぎて怖い……

ダメだ、不幸生活が長いから、もう不運じゃないと異常にすら思えてしまう。

4 - 大魔導師の本領発揮

町で生活することになって、俺は部屋を貰った。

それほど広い部屋ではない。しかし、紛れもない俺の部屋。この町の宿舎にあつて、まあいろいろな事態に使われる部屋だそうだ。

まさかの、一人暮らしスタート。

なのだが部屋にはルカが。

現在俺はアバウトにこの町の、この世界の現在について聞かされている。もうアバウトすぎて何が何だかさっぱりだ。

要約すると、とても不安定な状況で、いろいろな要因が飽和して、なんとか均衡状態を保っているそうだ。なるほど、分からん。

「この世界にはいくつかの大国と、それに支配されている小国と、その関係から抜け出して独立して都市を形成している独立都市国家が存在する」

「なるほど、分からん」

「……続けるぞ。大国は分かるな？」

「大きな国だ」

「小国は？」

「小さな国だ」

「その通り」

本当にそんな理解で良いのだろうか……

「そして独立都市国家だ。私たち独立都市国家ミッドガルドもこの勢力に当たる」

独立都市国家ミッドガルド。これがこの町、というか都市国家の名前ということらしい。

「大国同士は……戦争を続けていた。そして小国や、そこに住む国民たちは大きな負担を強いられている。最悪の状況だ、いやそういう状況だった」

「ということは現在は？」

「大国のために小国が負担を強いられるという状況に変化はないが、今現在大国同士の表立った戦争は行われていない。といっても何か小さな火だねでもあればそれが大戦のきっかけとなりかねない危ない状況ではあるがな」

うーん……

聞く限り、元の世界よりも数倍危険な世界にしか聞こえない。

「そこで、私たちのような独立都市国家だ。私たちは、規模は小さく、数も多くは無いが……一つ一つが、腕利きの魔法使いをそろえた、いわば武力国家のようなものだ」

つまり、町にいるのは誰しもが強い魔法使い。当然ルカも……と
いうことか。

そういえば髪の色は白に近いほど魔法の素養があると聞いたけど、それで考えると銀色の髪のル力は相当の魔法使いなんだろうな。

「独立都市国家どうしは、繋がっている。そしてこの繋がりこそが、大国をけん制している」

「……どういうことだ？」

「私たち独立都市国家は、独立している。つまりどの国の下でも、どの国の上にいるわけでもない。常に同じ高さから大国の動きを監視している。そして、大国が行き過ぎた動きを見せれば、私たちは共同戦線を張り、他の大国とも協力し、行き過ぎた大国に攻撃する」

「……思っていたより、この世界は危険かもしれない。」

話し続けるル力は無表情で、辛いのか悲しいのか、それとも無関心で興味が無いのか分からない……

「……こんなところだ。この世界は、安定しているように見えるが実情は違う。いつ崩壊するか分からない。ミッドガルドを離れるような時は気をつけるよ」

ル力はそういうと、俺の部屋から出ていった。

最後にはまた柔らかい表情に戻っていた。

「……さて、改めて、まさかの一人暮らしが始まった。」

独立都市国家ミッドガルドでの仕事というと、他の独立都市国家

や小国、たまに大国からの仕事の依頼を受けて、それをこなして報酬を受け取るというものらしい。

俺はどうやら、ミッドガルドでは即戦力兼最強の仕事人という認定をされてしまっている。今度でかい仕事を回してやる、とか言われたけど、そんなもんいりません。

ということ、暇なので部屋で寝ていると、部屋のドアをノックされる。

そして俺が何か答える前に、人が入ってきた。

「失礼します」

ああ失礼だ。

だがそんなこと口に出せないので返答する。

「どうぞ」

入ってきたのは、プラチナブロンドの長い髪の女性。顔は綺麗、クールビューティという言葉が似合うだろうか。こういう人と関わると、苦労することは18年間で知った。

さて、どうなるか。

「私は、リーチェといいます」

名乗られた。ならば名乗り返す。

「俺は涼介」知っています、ここにあなたの名前を知らない人はいませんか？」

そうでした。

「リヨウスケさんにお仕事があります」

ほう、俺にやってくる仕事というと、どんな仕事だろうか。ルカは俺にはでかい仕事を回すと言っていたから、そんなに簡単じゃないんだろうな。

いや……だなあ。

「内容は？」

「えっと、これはルカからの依頼ということなんですけど……」

ルカから？ それならさっきなぜ伝えなかったんだろう？

「今日は魔法部隊の演習なんですけど、その相手を一任したい」と

それはつまり、部隊VS俺ということだろうか。

「死なない程度に遊んでやってくれ、と」

ルカ、俺が死ぬから。常識的に考えて、部隊って名前がつくものに単身で勝負を挑むというのはおかしいだろう。

「えっと、演習開始は10分後くらいです」

「は、はええ！」

「ルカの思い付きですから」

思い付きかよ！ どおりでさっき言わなかったわけだ。

「めちゃくちゃだな……」

「ええ、可愛いですよね……」

「え？」

ん、なんかこの子目がぼーっとしているけど、気のせいだよな？

10分後。演習場、という名前の森の中。これ絶対にルカが
いま思いついたんだと思う。

なんだか魔法部隊の人たちも、あきれ果てた表情だ。

これはきつと、演習場が即席すぎることや、そもそもほとんどし
てなかったと思われる演習が突然行われたことでもなく、きつとル
カの突然っぷりに呆れているんだと、なんか分かった。

そして、魔法部隊の先頭……リーチエさんが立っている。

その目は最初のクールな目つきでも、一瞬垣間見えた気がしたぼ
ーっとした目でもなく、殺気に満ちている。

魔法部隊の人たちも、俺の姿を認めるとその目をぎらつかせ始め
る。

「行くぞ！ 演習だからといって、手は抜かん！ 覚悟しろ！」

……え？ リーチエさんキャラ変わりすぎじゃねえ！？

……しかし、どうしたのか。いまいち魔法の使い方はよく分からないんだが……

「吹き飛ばせエー！」

リーチエさんの声が森に轟く。

すると直後に、轟音が、そして木々が揺らいでいる。これは、風が来る。というわけで風を防ぐために、鉄の箱を出現させる。

だがそれもむなしく箱もろとも風に吹っ飛ばされた。

「ぐはっ！」

地面に背中を打ちつけた。

あり得ないだろ。どんな強風ならば一辺約3メートルの鋼鉄の立方体を軽々宙に浮かせられるんだよ！

……しかし、本気なら、こっちも本気で行かないと。じゃないとマジで殺される。

「お前ら、ちゃんと防御しろよ！」

俺の一言に、魔法部隊の全員が身構える。

とりあえず、背中がすごく痛かったから、軽く仕返ししよう。

突風をイメージ。威力は今のぐらい。ちょうど、鉄の箱が軽々宙を舞う程度の力を持った突風。

発生地点は俺の目の前。

「吹っ飛べ！」

俺の声、そして轟音。

さつきと同じ現象が逆の向きで起こる。大人数の魔法部隊全員が宙を舞い、それぞれ木に激突したり地面で腰を打ったりしている。ざまあみる。

「う……まさか、一目見ただけで私の魔法を……」

リーチェさんが悔しそうに呻いている。

「やはり魔王……」

「鬼だ」

「異世界の大魔導師……」

「鬼畜道化師……」

俺の評価がすごいから、ただの化け物に落ちていつている気がする。てか最後のは違う気がする。

「相手が誰でも、俺たちは負けねええええ！」

真っ先に強者に叩きのめされるタイプの人が、片手に雷を纏わせてバチバチいわせながら走って突っ込んできた。ので、こちらは雷を離れた距離から放つ。

「ぐえっ」

「勝てない……のか」

うーん、しかし圧勝しすぎかなあ……

これはルカの思い付きだけど、演習だって言ってたし。

「よく、耐えてくれた。後は任せろ」

どこからかルカが現れた。

何このタイミング、そしてこの空気。ヒーローは遅れてやってきますってか？

俺は人生ヒーローになんかなったこと無いさ、てかヒーローがどんな状況でも助けに来てくれたことも無いさ。消防車すら来ないから、火自分で消したよ。

「ルカ……」

なんかリーチェさんの目がまたぼーっとしている。

そうか、こいつが、リア充か。

「リヨウスケ、私が相手だ」

……てか、俺が敵ですか？

いつの間にそんなことになったのか、俺には全く分かりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9307m/>

異世界ライフは幸せだろうか

2011年8月10日10時15分発行